



異文化に学ぶ

齋 木 久 美

題字は川又正筆
茨城国語教育学会
会報さらしめ
第三十七号
発行所
〒310-0056
水戸市文京2-1-1
茨城大学教育学部
国語教育教室
茨城国語教育学会
電話 029-228-8111(代)
228-8214(直)
印刷所
〒310-0043
水戸市松が丘2-3-23
佐藤印刷株式会社

先月、台湾芸術大学で開催された「書如也」というテーマの学術シンポジウムに参加しました。このシンポジウムでは、台湾から三件、日本から四件、合計七件の研究発表が行われました。発表と質疑応答は通訳を通じて行われるため、一件の発表には五十分が割り当てられていました。

興味深かったのが、その進め方で、壇上に、発表者と座長とともに代表質問者とも言うべき役割の人が登壇し、研究発表後に、この代表質問者が意見や感想を述べるのです。私たちが日頃参加する学会では、発表後に会場から質問がない場合、司会を務める座長が場を持たせるために質問をすることがあります。しかし、自身の研究とは異なる分野の

発表で座長を務めている場合は、的確な質問ができるとは限りません。その点、この代表質問者という制度は、その分野に詳しい人材をはじめから用意するため、発表者の説明不足を補い、聴衆の理解を助けるような質問を投げかける役割を果たしてくれます。

開会式で日本側の代表として挨拶をされた河内氏は、「日本側にとつては慣れない方式ですが、大変勉強になります。」と述べていました。

その後、日本の発表に対して、代表質問者を務めた台湾の研究者が、発表内容に関連する日本側の発表者が知らない作品について紹介する場面があり、代表質問者の見識の高さに会場は感嘆の雰囲気包まれました。

台湾で採用されていたこの方式では、十分に準備された代表質問者のコメントによって理解が深まり、議論のきっかけにもなっていました。さらに感心したのは、午後の発表の途中に四十分間の「茶叙」というお茶の時間が設けられていたことです。甘味などをいただくながら参加者同士が交流するのです。今回、日本語で話しかけてくださる方ともお話しする機会があり、大変有意義でした。

最後に行われたのは、五十分間の「総合討論・閉会式」です。閉会の挨拶だけでなく、登壇者が全体の批評や今後の展望を述べるなどとして、まさに討論が行われました。徹底的に議論しようとするこの方式から、多くのことを学ぶことができました。

代表質問者を用意する台湾の発表様式を褒めました。海外から見ただけ、日本にも独自の優れた研究様式があります。私たちが当たり前のように行っている「授業研究」です。

「授業研究」という研鑽方法は、世界中どこでも実施されているわけではありません。これは、明治以来の日本の教育実践の中で育まれ、教師の研鑽の場として機能してきた日本

発のものなのです。

代表質問者を活用する台湾の発表方式や日本で生まれた授業研究という方式のように、世界の各地では、様々な方式が使われています。ただ、自分自身が知らない、新たな研究研鑽の様式を知るために、必ずしも海外にまで出かける必要はありません。日本国内であっても、異なる地域では異なる様式が採用されていることはとても多く見受けられます。近県や県内他地域でもかまいません。興味あるテーマの勉強会や研究会があつたら、積極的に参加してみましよう。表題に「異文化」と書きましたが、「異文化」は決して外国に行かなければ出会えないものではありません。私たちはふだん、顔見知りの多い会にはかり参加しがちですが、是非、あまり付き合いない会に行ってみましよう。海外にいった時のような新鮮な気持ちで見回せば、きっと新しい発見があるはずですよ。

(茨城大学)



茨城国語教育学会活動記録

「茨城大学・附属中・小の懇話会」

鈴木 裕 也

本会は茨城大学・附属中・附属小の国語教員が国語教育について語り合う会である。令和六年度は、十二月二十日(金)、附属中にて開催した。附属中からは中村・小林、大学からは齋木・鈴木(裕)、が参加した。今回は、特に教育実習について、相互理解を深めることができた。

○附属学校での教育実習を充実させるために学生に考えてほしいこととは？

・三年生の附属小中学校での実習は、同じ大学、同じ選修の学生が多数で行う。実習生が互いの授業を参観することにより、授業を改善することができ良さがある。
・実習生自身が「授業でやりたいこと」をしっかり持っていないと、最初の指導教員とのやりとりでは、教材をどのようにとらえたのかの確認から始まることになってしまう。実習が始まる前までに、教材をよく読み、「授業でやりたいこと」を考えておいてほしい。

・実習生は、授業で伝えたいことが多くあり、一回の授業にそれを全部入れ込もうとする。しかし、それだと児童生徒の負担が大きくなってしまふ。児童生徒に一番身に付けさせたい力は何かを考え、「焦点化する」ことを意識してほしい。

・「自分が」授業で伝えたいことだけを考えるのではなく、「相手(児童生徒)」が「自分の授業で何を身に付けるのか、という視点でも考えられるようになってほしい。

・四年生の協力校実習は、母校実習が中心になってきている。母校の方が実習生はモチベーションが高くなると考えられる。附属での基礎実習を活かして取り組んでほしい。

○国語を教えるやりがいとは？

・国語は他教科と異なり、教材が提示されている。複数の実習生の授業を参観しても分かるように、同

じ教材でも、授業方法が異なっている。指導教員も、実習生の授業から、学ぶことが多々ある。

・説明的文章を大学で扱う機会が少ないように思う。説明的文章は実社会で役立つので、興味をもつ児童生徒も多いと考えられる。

○実習に対する心構えとは？

・基本的なことであるが、自分から挨拶をすることは大事。

・SNSの運用に気をつけるようにしてほしい。

・実習中はしっかりと休息をとる。

○実習で意識されていることや、学生へのアドバイス。

・前倒し教員採用試験に向け、二年生が三年生の一斉研究授業を参観するなど、二年生が実際の授業を見る機会を持てるとよい。特に茨城大学と附属中は近いという利点があるので、積極的に足を運んでほしい。

・学生には、「人とのつながり」を大切にしてほしい。教員として現場に出たときに、縦のつながり(先輩・後輩間)、横のつながり(同学年間・他教科も)が重要である。

現場に出たときに、茨城大学出身の教員は多い。

・授業を実践する機会が、実習生ごとに異なる場合がある。実習をさせていたいただいているという意識を忘れずに、国語選修の学生が率先して授業を担当してほしい。

最後に、ひとこと・・・

・教員の志望率を上げるには、教員の待遇改善とともに、実習を通して、「教員になるモチベーション」と「教員としての資質」の両者を向上させることを目指していきたいと思っています。

(茨城大学)



第四十三回茨城国語教育学会研究発表会報告（令和七年三月八日）

文責・事務局 宮崎 尚子

令和六年度の研究発表会の概要について報告いたします。今回で第四十三回を数える研究発表会は、令和七年三月八日（土）午後、茨城大学教育学部D棟D二〇一教室を会場として対面開催されました。

十三時より学会総会が行われました。昌子佳広先生から、会計報告が



行われ、会則について学生・大学院生は卒業時に正会員に登録するかどうかの意思確認を行い、正会員登録時に入会金二千円納入をもって言わば「終身会員」とする旨確認がありました。会報『さらしゐ』と会誌『茨城の国語教育』（会員にはPW配布）をWEB上で閲覧できるようにしたことにも付け加えられました。

十三時三十分からは、鈴木一史先生の司会で、四名の登壇者とのシンポジウム「実践力とは何か―研究と教育の架橋を目指して―」が開催されました。富岡紗子さん（教職大学院一年生）は大学院の学びを通して、研究が何かを知り、その内容が非常に豊富であることを知った、学生の実践力は気付きや発見にあることを感じたことと述べられました。井上敦子先生（茨城県立太田第一高等学校）は古典授業の中で、ご自身が院生時代に没頭した研究の要素を取り込んで納得のいく授業できたことを紹介されました。作品の持つ力を信じて

自己研鑽を重ねることが研究で、目の前の生徒に向き合うのが教育と述べられました。市野沢直樹先生（日立市立多賀中学校）はリライトを言語活動に位置付けた学習指導を内地留学の際に取り組まれたお話をされました。成果物の評価を意識しながら、単元計画とルーブリックを組み合わせた指導計画を紹介されました。

昌子佳広先生は、ご自身の内地留学や大学院進学のお話をされ、自身自身の課題である研究と子供をどう育てていくのか問い続ける実践力を繋げるのが大事と述べられました。フロア参加者からの発言もあり、受験

国語と価値ある国語の乖離がテーマとなりました。鈴木一史先生が「それぞれの先生方の言葉を自分の中でつなげて欲しい」と結ばれました。

十五時から、令和五年度に国語学教員として着任された鈴木裕也先生のご講演「国語学と国語教育の連携における課題と展望」がありました。鈴木裕也先生は国語教育におけ



る国語学の取り扱い時間が少ないことを指摘されました。その後、ご専門である日本漢字音から見た『類聚名義抄』に関する研究を深く掘り下げて、国語学の魅力を十分に紹介されました。

参加者それぞれが、研究と教育の架橋について思いを深める機会となり、学生達も現場の先生方から刺激を受けました。



仙台の魯迅の足跡を探しに

―附属中学校との連携研究についての記録―

李 満 紅

二〇二四年一月十三日と十四日
したような気持ちになりました。

の両日、魯迅の足跡を求めて仙台に行ってきました。参加メンバーは附属中学校の中村麻里那教諭、教育学部の宮崎尚子准教授・李満紅助教、熊本県立大学大学院生の宮崎由子氏の四名です。

仙台医専時代（一九〇四年九月～一九〇六年三月）は魯迅にとつて大きな転換期でした。医学の道をやめ、文学の道を志すことになった時期です。

第一創作集『呐喊』（一九一三年）の自序と仙台の思い出を描いた作品「藤野先生」（一九二六年）によれば、仙台医専二年次の授業で見た日露戦争に関する幻灯写真がそのきっかけでした。今回はその幻灯写真を見た階段教室を見学し、仙台医専で使用された幻灯用のガラス板も確認しました。作品中で言及したその画面は見たかもしれませんが、魯迅が実際に見たガラス板が東北大学史料館の展示資料に含まれていました。

階段教室の魯迅が座っていた席に座り、百二十年前にタイムスリップ



魯迅席の下の床は擦り減っていた、ここが魯迅研究者や魯迅ファンの聖地の一つであることを物語っていました。



魯迅が生活していた場所や歩いた道などの調査も行いました。仙台魯迅故居（第二下宿）の跡地は公園として整備されていて、魯迅も眺めていた仙台の川や山が一望できました。



魯迅の作品において、土地、風土などは大変重要な要素です。今回の調査は国語科の定番教材『故郷』の補助教材の開発にあたって参考になることが多くありました。その成果は近いうちに学術雑誌にて公表する予定です。

連携研究の紹介及び今後の展望

定番教材『故郷』には、「回想」という形で語られる少年時代の「私」と閩土とのやりとりの部分があります。その部分が中国の小学校教材に『少年閩土』として採用されています。中国では、この少年期の回想場面を小学校で学習した上で、中学校で『故郷』の全文を学ぶことになっています。二〇二二年度から中国での学習方法を参考に、附属学校で実験教育を行っています。共同研究グループのメンバーは附属中の中村麻里那教諭・小林圭太教諭、教育学部の鈴木一史教授・宮崎尚子准教授・李満紅助教、熊本県立大学大学院生宮崎由子氏です。二〇二五年度以降は『故郷』の舞台である中国浙江省紹興地方及び魯迅生家を踏査し、現地で撮影した写真や映像などを活用して、『故郷』の舞台をVRで体験できるデジタル教材の作成に取り組みながら、実験教育を継続し、附属の教員との連携研究を行う予定です。

なお、仙台調査は茨城大学女性エンプowerメント支援制度（研究代表者・李満紅）を利用して行いました。

（茨城大学）

台北日本人学校での インターンシップを通して

松木 優 杏 ・ 横 井 月 野

私たちは、令和七年二月十七日から二十一日の五日間にわたって台湾の台北市にある台北日本人学校でインターンシップに参加した。松木は五学年、横井は二年生の各学級に配属され、主な活動内容としては、授業見学・実践、担任補助、先生方の講話による研修を行った。

学んだこと・感じたこと

インターンシップを通して、特に学び続ける教師の姿勢の大切さと国語の授業を行うことの難しさを実感した。台北日本人学校の先生方は常に児童をよく観察し、児童が主体的かつ自分自身で思考できるような授業づくりのためにICT教育等の研修や話し合いを行っていた。こうした自己研鑽と日々の学級経営によって児童の発表や討論が活発な児童主体的な授業になっており、このような授業と先生の姿を間近で見られたことは貴重な学びとなった。また、授業に関しては五学年の三学級に計四時間国語の授業実践を行ったが、同じ授業でも学級によって討論の内

容が異なり授業の終着点が本来のねらいから逸れてしまった。加えて外国にルーツのある児童の中には日本語での会話は問題なく出来ても、学習的な日本語が不自由で国語の読解や物語の主題を検討するような活動は難しいことも実感した。今後は今回の課題を解決できるよう精進していきたい。

(松木)

授業実践の経験はほとんどなく、教育実習も未経験、加えて活動地は異国の地という中でこのインターンの参加に、当初は不安でいっぱいだった。「机の上だけじゃ学べないことを学びたい!」と、半ば勢いで応募したことを後悔しそうになったこともある。しかし、学校に訪れてみると、子どもたち、先生方、保護者の方までもが、私たちを温かく歓迎してくださり、思い切って参加して本当に良かったとインターン初日から感じた。初めての授業実践も、子どもたちと全力で遊んだ休み時間もすべてが大切な思い出で、私の人生の糧になった。

(横井)

おわりに

今回の台北日本人学校でのインターンシップを通して、上記だけでは伝えきれないほど数々の経験をすることができた。この五日間は今後実施する教育実習は勿論、教員とし

て現場で働く際にも活きる確信できる経験だったため、今回学んだことをさらにブラッシュアップできるように、今後の学習に励んでいきたい。

(三年次生)

芥川龍之介学会でのフィールドワークで 感じた台湾の伝統・文化

上 野 美 優

二〇二四年十一月中旬、宮崎尚子と李満紅の両先生の引率で「国際芥川龍之介学会第十九回台湾大会」に参加した。学生の参加メンバーは院生の齋藤歩実、富岡紗子、上野美優、学部生の西牧花、芳賀昂斗の計五名であった。学会は二日間の研究発表会(十六日、十七日)と二日間のフィールドワーク(十八日、十九日)の二部構成の形で開催された。研究発表会の会場は台湾輔仁大学で、芥川関連の講演と研究発表が行われた。フィールドワークは台中の佐藤春夫ゆかりの地を巡った。

本報告はフィールドワークの一日目についてのものである。当日、霧社、莫那魯道紀念公園、日月潭、涵碧樓、日月行館、涵碧樓紀念館名人牆、

集集車站などを訪れた。最初の霧社では、当時の日本の植民地支配に対する影響を見ることができた。霧社という地名の名は霧社事件とも知られている。霧社事件とは、一九三〇年十月二十七日に、その地のセディック族が運動会中の日本人を襲った事件である。当時、日本人は原住民である彼らの伝統や文化を無視した支配を行っていた。そのような日本の植民地統治が霧社事件へとつながっていったと考えられている。霧社周辺は自然が豊かな町で、ここで暮らす人々は穏やかにのんびりと生活を送っていたのだらうかと考えた。そのような平穏な暮らしが奪われようとする事態に対して原住民たちは抵抗を行った。霧社事件を鎮圧

させるために日本軍も出動し、最終的には村がほぼ全滅するという悲劇的な結果で霧社事件は幕を閉じた。日本人による支配がいかに非情なものであるかが分かる。また、その後訪れた莫那魯道記念公園には、霧社事件で蜂起に参加した原住民の姿を銅像にした記念碑があった。槍などの武器を手にするその姿はとても勇ましく日本の支配に対して激しく抵抗していたということが感じられるものとなった。フィールドワークで実際にその土地の風景や文化に触れ、目で見ることでしか体感することではわからない歴史もある。

霧社、莫那魯道記念公園に続いて日月潭を訪れた。日月潭では遊覧船に乗って周囲を巡った。遊覧船からは、自然の景色やホテルなど変化に富む景観を楽しむことができる。私たちが日月潭を訪れた日は天気がありよくなかったため、景色はあまり楽しめなかったが、晴れていれば、言葉にも表現し難い美しい景観であったのだろうかと考えた。文学作品の中では、度々美しい景観が巧な言葉によって表現されている。旅に出て心動かされるような景色を見ることも文学を創作する上での刺激となるのではないかと考えた。

日月潭を訪れた後、涵碧樓記念館

へと向かった。ここでは、原住民サオ族と日月潭がどのように形成されていったのかについて知ることができる。日月潭という名前は、湖に浮かぶラル島から由来しており、東側が太陽、西側が月の形をしていることによる。サオ族の先祖はそこを住居としていた。

その後、集集車站を訪れた。実際に集集車站に着いた際は夜で辺りが暗くなっていたため、あまり良く見ることが出来なかったが、木造の建物が使われている集集車站の駅舎は一九三〇年に完成し、日本統治時代の影響を大きく受けている。一九九九年に台湾中部を襲った地震により被害を受けてしまったが、現在の駅舎は元の姿に復元されている。日本統治時代の建物が使われているだけあって、実際に見た集集車站の駅舎はどこか日本の昔の駅舎を感じさせるものであった。

今回の国際芥川龍之介学会台湾大会の後、十一月一八日に行われたフィールドワークを通して、その地に足を運び、文化や伝統を体感すること、文学と景観とのつながりについて考えることができた。霧社をはじめとする日本の植民地支配に抵抗する人々の様子やその地にある記念碑などは普段日本で生活をしている

私たちは知ることはできない。こうしたその土地に住む人々の文化や伝統を感じることができるとフィールドワークの意義であると私は考える。また、フィールドワークは文学踏査であるために、文学と切

私の「これぞ」

芳賀 昂斗

教育者として子どもに教えられることは何だろう。不意にそう思う時がある。確かに色々な経験はしてきたが、これぞといったものはない。だが、今回の経験はそんな私に、「これぞ」をくれるものになったのだった。

二〇二四年十一月中旬、私は芥川作品ないしは文学研究の理解を深めるべく国際芥川龍之介学会台湾大会へと参加した。本大会は四日の間に行われ、研究発表とフィールドワークをそれぞれ二日間という構成であった。私の記事では、四日目のフィールドワークに焦点を当てていこうと思う。

フィールドワーク二日目、私たちは霧嶺林家に縁のある地に訪れた。

り離して考えることはできない。自分が体験した伝統や文化、景観をいかにして言葉にしていくか。芥川龍之介や佐藤春夫などはこのようなことを考えながら作品を作っていたのではないかと考えた。

霧嶺林家とは台湾中部有数の名家の一つで、台湾近代史に重要な影響を及ぼした一家である。そんな彼らの邸宅や庭園、博物館は台湾の歴史をたどる上で欠かせない名所となっている。見学していてもまず目を引いたのは、建物や展示品などの豪華さだ。邸宅の中にある芸能の舞台や派手な装飾、展示品などを見て、林家の暮らしの裕福さと同時に、台湾の絶妙な手工芸技術や豪華を意識する精神、いわゆる台湾文化も実際に感じ取ることができた。日本の「わびさび」の精神との違いがはつきりしているため、ぜひ皆さんにも体感してほしい。

さらに、台湾・日本史の学びも得られた。今でこそ台湾は親日国とし

て知られているが、日本から植民地支配を受けていた時代もあった。当時、その上下関係をなくそうと尽力した民族運動指導者が、林家の一人である林献堂という人物だ。林献堂の運動は、彼が収集していた家具や芸術品を展示する博物館にいつて知ったことで、これは私にとって当時の日本と台湾の確執や現在の友好な関係になった経緯を考える機会となり、国際関係への深い関心を持つ事ができた。

忘れたくないのは、これらは学会の参加者、主に現地の方々とのやり取りによって得られたものだということだ。見学する中で彼らの解説を聞いたり、その話題について意見交換したりして、多くの新たな視点を獲得することができた。このフィールドワークが私にとって充実したものとなったのは、偏に彼らとの交流が大きな要因となっているのは間違いないだろう。

今回の経験から、海外の文化を理解するには、現地へ赴き、そこに住む人々と交流することが重要だと感じたが、この認識は教育者として生かせるのかもしれない。というのは、教育基本法に記される教育の目標の中の次の一文が関係している。

「他国を尊重し、国際社会の平和

と発展に寄与する態度を養うこと。」尊重とは違いを認めることだが、その違いを正しく認識するには相手の視点に立つことが重要だ。今回の経験を子どもたちに伝え、彼らにも海外渡航への関心を持たせる、この

学会と去年度を振り返って

富岡 紗子

私は学会二日目の話をしたいと思います。二〇二四年の十一月に開催された当学会では、多くの発表を拝聴して、素晴らしい出会いと刺激を得ることができました。私は他大学から茨城大学の教職大学院に進学してきました。共に励む意欲の高い仲間たち、切磋琢磨し情報共有しながら「国語」と真摯に向き合う教員の方々、そして各々の専門分野からみるさまざまな「国語」の姿を教えるくださる大学教授の先生方、多くの出会いがありました。当学会ではそのような「国語」や「文学」を追求しようと努める方々と国を超えて交流できました。

当学会のテーマは「芥川万華鏡読み解かれるもの・生み出されるもの」でした。いかにして芥川を見出していくか、その方法や発想の豊かさには驚かされましたし研究がいく

ような取り組みが本目標達成に繋がっているのではないかと感じた。そして、これこそが私の教えられる「これぞ」になると、そう思うことのできる大会であった。

から進んでいっても研究の余地は残されているのだと感じました。そして、交流があつてこそ研究が深まってくということを感じることができました。また、発表を拝聴して芥川自身もさまざまな交流を経て思考を巡らせながら執筆し作品を残してきたことが分かりました。「ことば」を通して繋がっていくこと、そして繋がりを通して「ことば」を紡いでいくことその連鎖が起きているように感じます。その連鎖で私たちと文学との繋がりは一層深いものになっていくのではないのでしょうか。

学会を経て、国語の教員を目指す

身として作品研究や作品理解について考えていました。作品を理解するのは容易ではありません。一定のステップを踏めば理解できるものでもなければ、一定の時間を要すれば理解出来るものでもありません。むしろ文学とは理解できるものではないです。でも人は理解しようと考えたり悩んだり調べたり聞いたりします。なぜでしょう。「文学」と調べると「人間の感情や情緒に訴える芸術作品」といった内容が出てきます。文学は鑑賞されるものです。文学を理解しようとする中で、その味わい方が変容したり深まったりしていきます。理解しようとすることで深く味わえる文学に皆夢中なのだとひとりだに思いにふけていました。噛めば噛むほど味が出るようになるのです。

改めて、昨年度は多くの方々との出会いや協働によって、大変充実した学びをすることができました。今年度ではそれぞれの先生方からさらにお話を伺い指導を仰ぎ、成長できる年にしたいです。

